

## 6月の大統領選でロウハーニーが電撃当選

### はじめに——今回の選挙の背景

イランでは6月14日に第10回大統領選挙が実施され、改革派に近い穏健保守派のロウハーニー候補が当選した。今回の選挙はアフマディネジャードが再選した2009年6月の第9回選挙の際に勃発してイラン・イスラーム体制そのものを揺るがした民主化要求運動が当初から様々なかたちで影響を及ぼしていた。

それは選挙数ヶ月前から次第に規制が強化されたインターネット環境、ジャーナリストから外国人語学生までを含む選挙直前の外国人の入国規制、民主化運動の指導者たちへの厳しい活動制限などの形をとっており、今回の選挙がハーメネイー体制側の厳しいコントロールの許で行われるとの印象は否定できないほどに強かった。

同時に2012年初頭以来の欧米による対イラン経済制裁の強化という前回の選挙時とは別の要素もあった。イランの通貨リアルの為替レートは制裁強化前の1/3以下に下落し、物価上昇率は2012年1月以来対前年比で20%増、2012年12月以降は同30%増を記録している（ジェトロ・テヘラン事務所調べ）。

イランの核開発問題に端を発する国際的な包囲網はイランの市民生活を日々圧迫しており、さらにイスラエルによるイラン国内の核施設等へのサイバー攻撃の実施や先制攻撃の可能性はイランが直面する現実の脅威として国民一般に共有されている。

こうしたなか大統領選挙への立候補申請の締め切りぎりぎりの5月10日に改革派の領袖であるハーシェミー・ラフサンジャニー元大統領が立候補を表明したものの立候補を取り消され、改革派を中心に国民のあいだに失望感がひろがる。同時にアフマディネジャードの側近マシャイーも候補資格を認められず、結局680人程が立候補申請したなかで今回実際に立候補が認められたのは8人、うち改革派の候補はモハンマドレザー・アーレフのみであった。

### 今回の選挙結果とそこに至る経緯

各紙で報じられているように、6月14日の第一回投票結果は投票率72.7%、トップのロウハーニー候補が50.71%、以下ジャリーリー候補11.34%、レザーイー候補10.58%で決選投票をまたずにロウハーニーの当選が確定している。

この結果をみると、投票率それ自体がこれまでの大統領選挙と比べても比較的高かったことにより（例えば2005年6月の第一回投票では63%、2009年6月の投票では85%と発表された）国民一般の体制への支持を内外に示したかった体制側の最大の目標は達せられた。その上で50.71%という微妙な得票率で再投票をまたずにロウハーニーの当選が決まったということは、最高指導者ハーメネイーもこの結果を「承認」したことを物語っているといえよう。

現体制に近い穏健保守派の政治家でありながら同時に改革派にも近いロウハーニーの当選を

決定づけたのは、実は投票のあった6月14日のわずか数日前からの動きであった。今回この動きを加速させることになったのが、改革派のモハンマド・ハータミーらの説得による6月11日の改革派候補アーレフの撤退表明であった。

これにより改革派支持者の票がロウハーニーに集中することになり、さらに当初は選挙のボイコットを表明していた改革派がロウハーニーへの投票を促すように方針を転じたことで、投票日直前の時点でロウハーニーへの支持率が急伸していたことがIPOSの世論調査などからも伺えるのである。

さらに今回の選挙ではイランの各行政区ごとの最高得票者が明らかにされており、各県の最高得票者を色別にみることが可能であるが(Wikipedia)、これを見ると全国的にはほぼ一様にロウハーニーが高得票であったことが読み取れる。これは選挙直前の時点でゴムを中心にするイラン国内の宗教ネットワークなどもまたロウハーニー支持に動いたことを暗示している。

### ロウハーニー新政権の人選

選挙後の報道によれば、ロウハーニーの当選後に最初に会見した国内の有力政治家の一人がアリー・ラーリージャーニー国会議長であった。ラーリージャーニーはハーメネイーに最も近い政治家の一人と目されている人物である。また8月15日に国会が承認したロウハーニー新政権の閣僚リストにおいてもアリー・ジャンナティー文化指導相や革命防衛隊出身のホセイン・デヘガン防衛相をはじめ、保守派を中心に政府内各方面への人脈的な配慮をした内閣の布陣であるという事が伺える。

だが同時に新内閣の中心を占めているのは50代から60代前半の新しい世代であり、彼らは革命後に育ったテクノクラートとしてイラン社会の急激な変化をよく知っている。また今回のロウハーニー新政権でアフマディネジャード周辺のグループが一掃されたことは、前大統領が体現していた革命直後の時期の理念への回帰や、その時代に創設された革命防衛隊を核とする産軍複合体制の構築という政策目標が放棄されたことを物語っているといえよう。

今回のロウハーニー新大統領の登場が何よりもよく示したのは、1979年以來のイラン革命体制が2009年の民主化要求運動を経た現在でも「復元力」を保持しているという事実であり、今後将来的に最高指導者ハーメネイーの健康問題などが浮上するような場合でも、現在の体制を維持するための必要な対応が準備されていく可能性は高いものと思われる。

### イランは今後どう変化するか

6月の選挙で(今回もまた)大方の予想を裏切るかたちで登場したロウハーニー新大統領であるが、日本を含む国際的な関心の多くは核開発問題やシリア情勢への関与などの外交的な舞台でイランが今後どのような(どの程度の)変化を見せるかという点であろう。

改めて言うまでもなく、イランの政治体制において最終的な権限を持っているのは大統領ではなく宗教的な権威によって認められた最高指導者であるハーメネイーである。それ故ここで問題にすべきはロウハーニー新大統領の登場がハーメネイー自身の意図に沿っているかであろう。

今回の選挙の経緯をみると、選挙前の非常に制約された条件にあってもイラン国民の「民意」は改革派の政治参加による民主化と法の支配の実現を求めていることが改めて明らかになったといえよう。また核交渉においては、イランの国際的な地位を損なうことなく経済制裁による国民生活への圧迫を軽減することがロウハーニー新大統領にとって最初の大きな期待としてのしかかっていることは疑いない。

最高指導者ハーメネイーは 1979 年の革命当初から、ラフサンジャーニーとの永いライバル的共闘関係のなかで革命後のイラン国家の運営を担ってきた。その意味では元々独裁者的というよりは民意の動向に敏感なバランス的な資質の政治家であった。

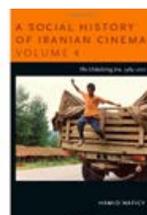
イランの革命体制はこれまで 30 余年間の歴史のなかで、事あるごとに異分子を排除し、そうすることで体制の維持・存続を図ってきた。だが 2009 年の民主化要求運動によって体制自体の存亡の危機に直面し、またその後の欧米による経済制裁強化に象徴される国際的な包囲網の強化によって体制危機が深まるなかで、ハーメネイー体制は恐らく初めてラフサンジャーニーやハータミーを初めとする改革派の主要政治家を再び体制内に迎え入れることにより、深刻な危機を乗り越える道を敢えて選んだものと考えられる。

最高指導者ハーメネイーによる認証式の翌日、8 月 4 日のロウハーニー新大統領の就任式には初めて国外からの列席者が招かれ、とくに中央アジアのカザフスタン、タジキスタン、トルクメニスタンおよびアフガニスタン、パキスタン、レバノン、シリアの各国からは元首クラスが出席してイランの新政権に対する期待感を示した。湾岸アラブ国ではクウェート、オマーン、UAE、カタールが高官を派遣している。イラン側からの変化に向けてのメッセージを今後米国や欧州各国、イスラエルなどがどのように受け止め、イランを国際社会のなかでどのように遇していくかは、将来的な湾岸地域の安定にとっても重要な要素になるものと思われる。

(鈴木均)

Column  
書評

**Hamid Naficy, *A Social History of Iranian Cinema*, vols.1-4, Duke University Press, 2011-2012.**



1990 年代以降世界的に受容され、ひとつのジャンルを確立した観のあるイラン映画のフランスからの技術導入期以来の浩瀚な通史である。筆者はこの分野で長年調査を重ねてきた在米のイラン人研究者。1800 ページにおよぶ内容はイランにおける映画を中心とした社会史として多岐におよび、第 1 巻「技術導入の時代、1897-1941 年」、第 2 巻「産業化の時代、1941-1978 年」、第 3 巻「イスラム化の時代、1978-1984 年」、第 4 巻「グローバル化の時代、1984-2010 年」となっているが、この構成は出版時の事情によるもので特別な理由がある訳ではない。恐らく新たに構成するとすれば、第 3 巻にイラン革命からイラン・イラク戦争期、第 4 巻に 1990 年代以降のイラン映画の興隆期を充てることになるであろう。

掲載した書影は『バーシュー』(B.ベイザイー監督)のスチール写真を用いた第 4 巻のものであるが、第 1 巻の表紙は『映画俳優ナーセロッディーン・シャー』(M.マフマルバフ監督)、第 2 巻は『雨の降ったあの晩』(K.シールデル監督)の写真である。また第 3 巻では『愛の小路で』(Kh.スィーナイー監督)からイラン革命の最中に焼討ちに遭ったアバダンのレックス映画館の場面が使用されている。なお本書は通常の冊子体でも販売されているが、アマゾンの Kindle をはじめとする電子書籍としても入手可能であり、後者の方が価格が安い点もあって広く流通しているようである。

(鈴木)